

『ぎんばしやかぼちゃ』

作…うさぎとかめのしつぽ

ここは小さなようせいがすむせかい。

そのようせいたちとともななかよしの馬、マドレーヌは小さな町で、小さなおかしやさんをしていました。大すきなようせいたちのため、毎日おいしいおかしを作ることが、マドレーヌは大すきです。

ある日、西からハヤブという馬がやって来ました。ハヤブは銀馬車かぼちゃという白いかぼちゃでできた大きな馬車を引いています。その馬車は、中に入るとホクホクとあたたかく、メロンのようにあまくていいかおりがします。そしてそれを気持ちよくゆらしながら引いてくれるやさしい馬…。

ようせいたちは、あつという間にハヤブと馬車が大すきになりました。

そのようすをお店からみていたマドレーヌ。

「いいなあ、ハヤブさん」

大きな体で、大きな馬車を引くにんきもののハヤブが、マドレーヌにはとてもかっこよく見えました。マドレーヌの体は小さいので、ようせいたちが大すきなあの大きな馬車は引けません。マドレーヌはさみしいきもちになりました。

ある日、マドレーヌはハヤブが休んでいる間に、少しだけいたずらをしてやろうと思いました。

おいてある馬車のはしっこを、かじって食べてしまったのです。あたたかくていごちのいいへやに、少しだけ風穴をあけてやるつもりでした。

しかしどうでしょう。なんとその銀馬車かぼちゃの馬車は、すごくあまくておいしいのです。はじめて食べるそのあじに、マドレーヌはいきおいがとまりません。

「おいしい！あまい！」

しばらくしてわれにかえると、マドレーヌはおどろきました。かぼちやの馬車はもう半分しかのこっていないかったです。

マドレーヌはこまりました。これではもうようせいたちはこの馬車に乗ることができず、ガツカリしてしまいます。

「こんなつもりじゃなかったのに……」  
とほうにくれるマドレーヌ……。しかし、しばらくして思いつきました。

「ハヤブさんは西から来たんだ。西にむかえば、銀馬車かぼちやを作っている場所があるかもしれない。新しい銀馬車かぼちやをもらって来て、ちゃんとハヤブさんにあやまらなくちゃ」

ですが、小さなマドレーヌの足ではなかなかたどりつけません。日もくれてまっくらになり、風もつめたくなってくると、ついにマドレーヌはなきだしてしまいました。

その時です。後ろから馬のいななきが聞こえてきました。ハヤブです。食べかけのかぼちやの馬車に、ようせいたちもしがみつくように乗っています。

「マドレーヌ、しんぱいしたよ」  
ようせいたちが言いました。

マドレーヌはハヤブのかぼちやを食べてしまったことをあやまり、かわりのかぼちやをとりに行こうとしていたことを伝えます。

「後ろに乗りなよ。このかぼちやを育ててくれたおじさんのところにいっしょに行こう」

ハヤブはやさしい声で言います。

マドレーヌはみんながハヤブをすきなりゆうがわかった気がしました。

日がのぼるころ、ようやくたどりつきました。あさひにてらされて、ピカピカと光る石のようにきれいなかぼちやばたけ。よがあげたばかりだというのに、そこではすでにおじさんがひとりでかぼちやのおせわをしています。

マドレーヌが正直に話すと、おじさんは「人のものをおかしてに食べたのはよくなかったね。だけど、そんなにこのかぼちやを気に入ってくれたなら、おじさんもうれしいなあ。」と大きなこえでわらいました。ハヤブもわらいます。なみだをポロリと落としたマドレーヌのあたまを、ようせいたちはやさしくなでてくれました。

ハヤブは、はたけでいちばん大きなかぼちやで新しい馬車を作ってももらいました。

「今のやつよりもだいぶ大きいね」

とマドレーヌが言うと、ハヤブは

「そうだね。だからこれからはマドレーヌにも、馬車を引くのをてつだってほしいんだ」

マドレーヌは目をキラキラとかがやかせ、そして大きくなずきました。

それからマドレーヌはハヤブとともに銀馬車かぼちやの馬車を引くことになりました。おじさんにもらったかぼちやでおいしいおかしも作りました。またそれが大人気！

銀馬車かぼちやの馬車には、今までいじょうにたくさんようせいたちが集まるようになりました。

大すきなようせいたちにかこまれて、ハヤブとマドレーヌはとつてもしあわせそうです。